令和６年度

日　章　学　園

鹿児島育英館高等学校

入 学 試 験 問 題

国　　語

（時間 45 分）

（注　意）

1　「始め」の合図があるまで、このページ以外のところを見てはいけません。

2　問題は、８ページあります。解答用紙は１枚です。

3　「始め」の合図があったら、まず解答用紙に受験番号、中学校名、氏名を記入しなさい。

4　答えは、必ず解答用紙に記入しなさい。

5　印刷がはっきりしなくて読めないときは、だまって手をあげなさい。問題内容や答案作成上の質問は認めません。

6　「やめ」の合図があったら、すぐ筆記用具をおき、解答用紙だけを裏返しにして、机の上におきなさい。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（1～11は段落番号です）

1 ケータイから送信されるメールは、独自の文字変換機能が進歩してかなり便利になったとはいえ、パソコンから送信されるメールと比較すれば、それでもまだ文字を入力するのに手間がかかるため、その情報量は少ないといえる。ケータイを用いて交換されるメールは、コミュニケーション・メディアとしては不十分といわざるをえない。にもかかわらず、以上に見てきたようにケータイ・メールの利用頻度（ア）が急速に高まっているのは、それが①従来の意味でのコミュニケーションとは異なる目的で用いられるようになっているからである。結論を先取りしていえば、自己ナビゲーションのためのメディアとして用いられるようになっているからである。

2 社会学者の若林幹夫の言葉を借りれば、ケータイ・メールは「用件」を伝達するためのメディアではなく、「ふれあい」を目的としたメディアとして機能している（「ポケットの中の〈他者〉」『毎日新聞』朝刊、一九九七年三月九日）。メールで交わされるメッセージの内容自体はさほど重要ではなく、メールによってメッセージを交換しあう行為それ自体のほうに重要な意味がある。そこには「じゃれあい」や「愛撫」といった効果が期待されているのである。

3 ケータイ・メールの交換においては、即レス（メールを受信したらその場で直ちに返事を送ること）が基本的なマナーとして期待されている。とりわけ若い世代ではその傾向が強い。一日の生活時間の中で彼らがもっとも不安になるのは、たとえメールが届いても即レスを返すことができない入浴中だという。②もっともくつろげるはずの時間が、もっとも不安な時間となっているのである。即レスがそれほど強く求められるのは、メールに載せられるメッセージ内容の交換が第一の目的ではなく、メールを交換することによる「ふれあい」が第一の目的だからである。社会学者の北田暁大の用語を借りるなら、彼らのコミュニケーション欲求の背後にあるのは、何かを伝えようとする「意味伝達指向」ではなく、つながることを自体をめざす「接続指向」である（『広告都市・東京』廣済堂出版、二〇〇二年）。

4 ある中学生は、次のように語っている（香山リカ・森健『ネット王子とケータイ姫』中公新書ラクレ、二〇〇四年から重引）。

「結局、何を話すかじゃなくて、どれくらい速くレスが来るかどうかが、問題なんですよね。相手だってそうだと思う。お互い、向こうが自分にどれくらい気があるか、いつまでもさぐりあってるだけ。それも疲れるけど、やめると不安。」この言葉からスイソク（イ）されるように、即レスを返さないという行為は、言ってみれば、タッチしてきた相手の手を振り払うようなふるまいと感じられているのである。

5 じっさい、ケータイの利用に関して社会学者の中村功が行なった調査でも、用件連絡が主たる目的の場合には、音声通話のほうが優先的に選ばれるケイコウがうかがえる（「フルタイム化する若者の人間関係」時事通信社、二〇〇一年二月配信記事）。メールは、むしろ「おしゃべり」の道具なのである。だから、そこでは絵文字や方言、③擬音語、長音記号、幼児化表現、ギャル文字などが多用されることになる。

6 最近は、ケータイ端末に内蔵されたデコメ（デコレーション・メール）機能に取って代わられた観があるものの、たとえばギャル文字では、「なかいいなぁ」を「ナカヤ゛ヽ゛ヽ゛ヽ゛ナカヤ」と表記するように、一般の文字と比較して入力の打鍵数が倍に増えるので、必然的に情報量は少なくなってしまう。しかし、たんにビジュアル上のインパクトを狙っているだけではなく、それだけ相手のために入力の時間をかけたという事実が、それだけ相手のことを大切に思っているという気持ちを伝える手段ともなる。中村の言葉を借りれば、そこには「べたべたとした関係」が成立しているのである。

7 郵便局をつうじて自宅へ配達されてくる手紙を受けとる場合も、自宅の固定電話にかかってきた電話をとる場合も、最初に接するのが自分とは限らないから、メッセージを運んでくる人手の介在がつねに感じられる。それに対して、ケータイとは基本的に肌身離さず持ち歩く装置だから、メッセージが自分の身体にじかに届けられるような実感があり、人手の介在をほとんど意識させない。

8 ケータイを利用しているある若者は、「人の言葉が自分のポケットの中にまで届く実感がある」と述べている（『読売新聞』朝刊、二〇〇四年三月一七日）。社会学者の大澤真幸の表現を借りれば、ケータイによる通話やメール交換は、手紙や固定電話と違って「極限の直接性」を有している（「メディアの再身体化と公的な知の不在」『環』二〇号、藤原書店、二〇〇五年）。かつてメディア学者のM・マクルーハンがシテキしたように、もともと電子メディアは触覚的なメディアだが、とりわけケータイの触覚性には直接的な感覚がともなっている。

9 ケータイに代表されるパーソナル・メディアの④このような特性について、先ほど離れた若林は、ポケベルの時代からすでに次のようにシテキしていた（前掲記事）。「互いに顔を突き合わせ、姿をさらすことが、しばしばコミュニケーションに様々なカマえや緊張を生み出してしまうことを考えれば、身体的には決して出会うことなしに共にある関係を可能にする電気的なメディアは、ある意味で理想のコミュニケーション・メディアである。電話やポケットベルを介して現れてくる他者は、決して姿を現さず、シセンを投げかけてくることもないにもかかわらず、物理的な身体をもった他者よりもずっと近くから話しかけてくる。実際、電話やポケットベルほど身体に密着した位置から親密に話しかけてくる他者など、メディアの外側の世界には

滅多に存在しない。」

10 このような側面に着目するなら、ケータイとは、自分の内面が外部世界とじかに触れ合う触覚器官のようなものだといえる。一般的にいって、身体的な感覚をともなっており、しかも自らの内面に関わるものは依存症を引き起こしやすい。ケータイ依存やメール依存と呼ばれる現象は、ケータイが有しているこのような身体性から生じている。精神科医の香山リカらが行なった調査によると、依存症と思われるケータイ利用者は全体の約六パーセントほどだが、一〇代から二〇代に限れば約一〇パーセントに達している（「ケータイなしではいられない人の心理的ケイコウ」『モバイル社会フォーラム二〇〇七』報告資料、モバイル社会研究所、二〇〇七年二月三日）。逆に、身体性を有しておらず、自己を相対化しうるものは、手紙がそうであるように依存症になりにくい。

11 A、ケータイ・メールは文字数がキョクタンに少ないため、受け手の側がその内容を解釈するときの自由度が高くなる。B、メール依存症とは、濃密なコミュニケーションに対する嗜癖ではなく、むしろ「つながること」それ自体に対する嗜癖である。一般的にいって、嗜癖の対象は、それを得ることから生まれる快楽よりも、それを失うことに対する不安のほうが強くなりがちである。ケータイ依存やメール依存においても、相手とつながりつづけることから得られる快楽よりも、それが切断されることに対する不安のほうが強い。

（土井隆義「友だち地獄『空気を読む』世代のサバイバル」より）

問一　文章中の二重傍線部ア～クを、漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

問二　文章中の空欄 A 、 B に合う接続語として適当なものを、それぞれ次から選び記号で答えなさい。

ア　しかし　　イ　したがって　　ウ　つまり　　エ　そして　　オ　ところで

問三　文章中の波線部Ⅰ「必然」、Ⅱ「相対」の対義語を答えなさい。

問四　傍線部①「従来の意味でのコミュニケーションと異なる目的」とありますが、ケータイ・メールにはどのような目的があると述べられていますか。本文中の言葉を使って答えなさい。

問五　傍線部②「もっともくつろげるはずの時間が、もっとも不安な時間となっている」とありますが、これはどういうことか説明しなさい。

問六　傍線部③「擬音語」とありますが、次のア～エの中から擬音語を選び、記号で答えなさい。

ア　ざあざあ　　イ　きらきら　　ウ　ぐんぐん　　エ　うろうろ

問七　傍線部④「このような特性」とはどのような特性ですか。7・8段落目の言葉を利用し、「〜特性」につながるようにまとめ、二十字以内で答えなさい。

問八　「手紙」と「ケータイ」の違いを次のように説明するとき、空欄に入る言葉を本文中から五字で抜き出しなさい。

（　五　字　）の有無。

問九　本文の内容に合うものとして最も適当なものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア　手紙やケータイなどの接触性のあるメディアには若者が依存しやすい。

イ　ケータイのメッセージは感覚的なものであり、受け取る側の解釈に差が出やすい。

ウ　互いに顔を合わせないケータイでは精神的な依存ではなく、身体的な依存が強くなる。

エ　メールのやり取りは若者に不安感を持たせる反面、依存しやすくなる。

オ　人が仲介したメッセージは、受け取った人に内容が伝わりにくい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人の生活に最も大事なのは、自分の生を愛し慈むの感情である。生きてるということに対する自覚的な輝かしい感情である。なぜならば、そういう感情からこそ、本当に純な素直な力強い生活心境が生れてくるのだから。

この自分の生を愛する心を、吾々は忙忽（ぼうこつ）たる人事のうちにあって、往々にして失いがちである。そして第二義的なものに——生の本質にではなくして生の便宜たるものに——ばかり眼を向けがちである。名誉だの名声だの金銭だのというようなものが、ア更に卑近な方面では、衣食住に関する余贅（よぜい）なものが、吾々の前に立塞（たちふさ）がって、吾々の心を惑わし煩わしがちである。勿論それらのものは、生活に必要であり、活動力を刺戟（しげき）しはする。然（しか）しながら、それらのものに囚われる時、それらのものばかりを追い求むる時、人はただ功利に走って、本当の生活の味を味（あじわ）い得なくなる。①それらのものが目的となって、生きることが方便となる。

自分の生を——一生を方便とする、それほど惨めなあさましいA（あさましい）ことがあろうか。人にとっては生きることが目的であって、名誉や金銭や名声や衣食住に関する余贅などは、生きるための方便であるべきである。（勿論茲（ここ）に云う生きるということは、

単に生命を持続することばかりでなく、生きるということが必然に内包してる、仕事や働きなどをも含めて云うのである。）そして人を正しく生かすものは、己の生を愛する心である。

己の生を愛し慈む心を、吾々は大自然に接する時、最も多く体得する。

大自然に接すると、吾々は自己の微小を感ずる。人生に於て吾々の眼を強く惹きつけていたあらゆるものの価値が一時に払拭され、凡てのものの中心であった自分自身が微々たるものになって、ただ悠久永劫な大自然のみが、何物にも無関心な大きさで君臨する。その時吾々自身は、もはや、地上の虫けらにも等しく浜の真砂の一粒にも等しくなる。さまざまの雑念に脹れ上っていた吾々の心は、それらの雑念を払い落して、赤裸々な清さに澄み返り、さまざまな雑事をまとっていた吾々の生は、それらの雑事を払い落して、ただ在るべきままの姿で横たわる。其処にはもはや生も死もなく、生死を超えた悠久な落付きのみがある。そしてこの偉大な静平の中においては、ぽつりと冴えた心の眼が、自分の露わな生の上にじかに据えられる。それは輝かしい直接内観の瞬間である。生きてることが如何に有難く貴いかを、しみじみと感じさせられる。そして自分の生を愛し慈むの念が、胸の底から湧き上ってくる。

深山幽谷に身を置く時、大海に舟を浮べる時、或は仰いで大空に見入る時、吾々は最初自己の微小を感ずるけれども、何等かの妄念に支配されない限り、吾々はその感じに圧倒されるものではない。自己を微々たるものと感ずるのは、あらゆる雑念雑事を払い去った赤裸な自分自身に対する――平素見馴れない自分自身に対する――一時の頼り無さに過ぎない。心を静めて観ずれば、②自己の微小はやがて自己の偉大となる。小我を去って大我に還るとは、この間の消息である。たとい吾々の生が落ち散る一枚の木の葉に等しかろうと、その一枚の木の葉はやがて、深山幽谷全体の気魄に相通うものである。たとい吾々の生が波間に漂う一の泡沫に等しかろうと、その一の泡沫はやがて、大海全体の力に相通うものである。たとい吾々の生が一の仄かな星の光に等しかろうと、その一の仄かな星の光はやがて、天空に散布してる無数の星辰の輝きに相通ずるものである。而も不思議なのは、微々たる自分の生を静に見守ることによって、そういう広々とした境地へ踏み出していく、生きた心の働きである。生きてるということが、如何に輝かしい貴いことであるか！　吾々は大自然に接して初めて、本当に自分の生を愛し慈みたい念が、胸の底からしみじみと湧き上ってくる。

③第一にこの意味で私は、大自然を讃えたい。

（豊島与志雄「豊島与志雄著作集全六巻」より）

問一　二重傍線部ア～オの単語の品詞名をそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

a　名詞　b　動詞　c　形容詞　d　形容動詞　e　副詞　f　連体詞　g　接続詞

問二　傍線部①「それらのもの」が指しているものを本文中から十八字で抜き出しなさい。

問三　傍線部②「自己の微小はやがて自己の偉大となる」とはどういうことですか。わかりやすく説明しなさい。

問四　傍線部③「第一にこの意味で私は、大自然を讃えたい」とあるのはなぜか、本文中の言葉を使って答えなさい。

問五　波線部A「あさましい」、B「君臨する」の意味として適当なものを、それぞれ次の選択肢から選び、記号で答えなさい。

A「あさましい」

ア　浅薄だ　イ　卑しい　ウ　見るに堪えない　エ　はっきりしない

B「君臨する」

ア　広く眺める　イ　支配する　ウ　高位の人を敬う　エ　近くに寄る

問六　本文の内容を一文にまとめたとき、空欄に入る適当な語句を、それぞれ字数に合うように、本文から抜き出しなさい。

人にとっての目的は（Ⅰ　五字　）であり、人の生活に最も大事なのは（Ⅱ　九字　）である。

二問七が次のページに続きます。

問七　次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

虫の夢　　大岡信

「ころんで　つちを　なめたときは　まづかつたけど
つちから　うまれる　やさいや　はなには
あまい　つゆの　すいだうかんが
たくさん　はしつて　みるんだね」

こどもよ
きみのいふとほりだ
武蔵野のはてに　みろよ
空気はハンカチのやうに揺れてるぢやないか
冬の日ぐれは　土がくろく　深くみえるね

おんがくよりもきらきら跳ねてたテントウムシ
にごつた水を拭きまはつてゐたミヅスマシ
カミキリムシ
アリヂゴク
みんな静かにかへつてしまつた
土の大きな地下室へ

こどもよ
きみはにんげんだから
石をきづいて生きるときも
忘れるな
土のしたで眠つてゐる虫けらたちの
ときどきぴくりと動く足　夢のながいよだれかけを

かれらだつて夢をみるさ
いろつきの　収穫の夢
おんがくのやうな　水の夢

きみはにんげんだから
忘れるな
植物にきよらかなあまい水を送つてゐるのは
にんげんではなく
くろくしめつた　味のない
土であることを

きみはにんげんなのだから

（大岡信詩集「きみはにんげんだから」より）

(1)波線部①「ハンカチのやうに」とありますが、この比喩表現をなんというか答えなさい。

(2)波線部②「きづいて」を、漢字に直しなさい。
(3)波線部③「きみはにんげんなのだから」に続く言葉を考えて答えなさい。その際、三の本文と、問七の詩の内容もふまえてわかりやすく書きなさい。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

白河院の御時、*天下殺生禁断せられければ、市に魚鳥のたぐひ絶えにけり。そのころ貧しかりける僧の、年老いたる母を持[a]ちたるありけり。その母、日数経るままに、老いの力いよいよ弱りて[b]、今は①頼む方なく見えけり。僧かなしみの心深くして、思ひあまりて、[A]みづから川の辺りにのぞみて[c]、はえといふ小さき魚を一つ二つ持ちたりけり。官人見あひて[d]、からめとりて、院の御所に[B]まゐりぬ。

まづ子細を問はる。僧、②涙を流して申すやう、われ年老いたる母を持てり。ただわれ一人のほか、頼める人もなし。身の力すでに弱りたり。これを助けんために、思ひのあまりに、川の辺りにのぞめり。罪を行はれんこと、案のうちに侍り。ただし、この捕るところの魚、今は放つとも生き難し。この魚を母のもとへ遣はして、今一度あざやかなる味を進めて、いかにもまかりならんと申す。

これを聞く人々、③涙を流さずといふことなし。院聞こしめして[e](お聞きになって)、さまざまの物どもを馬車に積みて給はせて、④許されにけり。

(「十訓抄」より)

*天下殺生禁断せられければ…白河院が、生き物を殺しとらえることを禁止していたので

問一　傍線部A「みづから」、B「まゐりぬ」を、それぞれ現代仮名遣いに直しなさい。
問二　二重傍線部a～eの中で、主語が同じものをすべて選び、記号で答えなさい。
問三　傍線部①「頼む方なく見えけり」、③「涙を流さずといふことなし」をそれぞれ現代語訳しなさい。
問四　傍線部②「涙を流して申すやう」とありますが、僧が話した部分の最初と最後の五字をそれぞれ答えなさい。
問五　傍線部④「許されにけり」は、「お許しになった」という意味ですが、なぜ僧は許されたのですか。その理由を三十字以内でわかりやすく説明しなさい。